

ゝじ花やかに咲まじりたるを。
根やかはす小松まじりの岩つゝじ
うすひ山にて卯月二日遅櫻を見て。

杜鵑待や太山の遅さくら

武藏の國に至り熊谷の堤のほとりより、富士いと白く、
筑波山左みぎに見えて、いとおもしろき氣色なるに、
ほととぎすさへ杉の梢に音づれて、いはんかたなし。

夏山の上猶しろし富士の雪

夏に猶葉山しげ山筑波やま

杉むらは聲のしるしか郭公

此扇子返し侍るとて、書付てさしそへ侍りける。

世のうさも忘れてしたふ言の葉の花の林に入る心地して
山深みうき世の外の住居とて夏にしられぬ杉のかげかな
一、鷹司公染筆の和歌

十五日後藤演乘より、兼て依頼せし芳野山の和歌、鷹司右
府兼熙公へ□し御染筆の由にて到來す。頗る不堪珍玩者
也。彼什日來殊に感賞の餘、常に茅堂に掲置て且暮可爲吟
翫也。

一、源惟明へ返書の序に
十七日源惟明より書信あり、返書の序に書付。
いとひても猶いとほしき世の中を思ひ顔にも過る頃かな
過しつる此年月もはかなけれか斗りならむ世とは思はで

一、杜鵑の歌その他

廿日東叡山常照院庭中を望みて。

忘れや山ほととぎすおとづれてゆふべはえある庭の木立を

寄鳥述懐

出でやらで音をのみぞなく杜鵑うき世の業の繁きみ山を
誰がために憂ことしげきなつ山を出やらでなくやま杜鵑

曉杜鵑

月残る山の端いでゝほととぎすひと村雨の雲に啼きけり

五月朔柳營へ奉供にまで侍りしまゝ、又こん年は命
もしらず、是や東の名残ともなりぬべきやと思ひ侍り
ければ、幸に此ついで霞の關のふり果し名、尋まほし
く思ひ侍りしに、公用奉之、殊に一鞭をあぐるばかり
にて歸り侍るとて。

名にたてる霞の關はとめやらで浮世の道の隔てつるかな

又かへりみがちにゆく〜と思ひつゞけ侍りぬ。

世の業も其關の戸もかへりみる心のゆくは止めざりけり
霞の關の跡とはざりし念なさ、武康に書ておくり侍け
るを、今日かく書てたうべける。

昌興のまうとの、君の供奉にて霞の關のほとりを行過
けるに、仰により駒を早めいそぎぬる折から、さすが
古き名どころを見すぐしがたく、言の葉にばかり書て
おくられるに、返しとはなくて。

曇なき君につかへて行く道を如何に霞のせきとゞむべき

藤 武康

此返しとて又書て遣す。

霞の關の跡とはんとのあらまし、むなしかりし事、不
慮の障にもあらず。さしもかしこき仰ごと奉て也。し
かあれば兎角思ふべきにあらざりしを、さすが心に残
侍りしまゝ、一向にうちこめむも無下に思ひ、例のつ
ゞかぬことつゞり出て、藤武康丈の賢覺に入れ侍り
しに、いとまめやかなる詞書まで加へ給ひて、『くもり
なき君につかへて行道をいかに霞のせきとゞむべき』

と聞え給りけるにこそ、關の名残も打わすれ、身の愚
さもかつ思ひしられ侍りければ、聊謝し申侍るとて。
君が爲すぎゆく道はかへり見じいかに霞のせき止むとも
誠將來を思ふ心やりなるべしとて、申にや侍るらん。

一、菊池武康と贈答の歌

近頃藤武康の許へ抄物遣候序に、故武辰が書ける一帖、追
慕の爲にとて遣しけるを、昨日返し侍るとて。

身まかりしゆかりの人の書置し跡を、昌興のまうとの
深うあはれみて、跡ははかなき袖の浦浪など書添へら
れたるを、年月経て見侍りつゝ、悲しさやらんかたな
くおぼえければ。

なき跡を今みづくきもながれそふ涙やかへる昔なるらん

此返しとて又書て遣す。

ながれそう涙にかへる昔人もいつまで誰か忍びはてまし
水くきの跡にながるゝ涙川せきとめて袖におつる瀧つ瀬
一、山崎一相の母の愁に

五月九日山崎一相、母の愁にて忌籠し侍るを、とぶらひ侍
るとて、折から五月雨の空にさへ、いとゞ御袖の上もさし